

話の結末

大学受験を目前に控えた祐子は姉の家に泊まることにした。と言うよりも、最初から姉の家を宛にしていたので真面目にホテルを探さなかったのである。受験シーズンも真っ直中。どこのホテルも満杯だった。

姉の久美子は結婚して四年。都心から少し離れた郊外の家。夫の健介と二人で暮らしている。まだ子供はないので祐子は落ち着いて過ごせると思った。

健介は今年三十歳。フリーのテクニカル・ライターをしている。主な仕事は技術系の翻訳である。祐子に宛われた健介の書齋には訳の分からない洋書が棚一杯に並んでいた。その殆どが技術関係や工学系のもので、中には法律や特許関連らしいものも何冊か見える。

いずれは自分も物書きで身を立って行きたいと思っている祐子はその膨大な本の山に圧倒された気分だった。好きなことだけを書いて飯が食えるほど世の中甘くはないと言うことなのだろう。

祐子が本棚の片隅にタイトルが逆さ向きになった本の一群を見付けた。全てフランス語で装丁が他とは全く違う。どうやら小説らしい。

祐子がこれから受験するのは某私立大の仏文科。何故仏文なのか、その辺の理由は本人でさえはつきりしていない。パリに行ってみたい、屋根裏部屋で暮らしてみたい、そんな単純な動機から決めた仏文科だった。

祐子の中から一冊の本を手を取った。冒険と言う単語の意味は分かった。どうやら、若きドンジュアンの冒険、と言うのがそのタイトルらしい。ドンジュアン、スペイン語ならドンファンなのだが祐子にはそれすら分からない。素っ気ないページジュの表紙にタイトルと作者の名前だけ。出版社は『真夜中出版』と言う何やら意味ありげなところだったが祐子は別に気にも留めなかった。きつとロマンチックな小説に違いない。祐子はそれを健介に無断で借りることに決め、そっと自分のバッグにしまい込んだ。

受験は案外呆気なく終わった。山が当たったと言うか、祐子の得意な分野が数多く出題されたのである。元々国語には自信があったし、英語もまず問題なかった。一番心配していた世界史も中世から近世の出題が多く、苦手なギリシヤ・ローマ時代は無かった。

結果に九十パーセント自信が持てた祐子は姉の家に戻ると義兄の書棚で見付けた本を辞書を引き引き読み始めた。まだ三日後に第二志望の受験が残っていたが、かなり気分が楽になっていたのである。

その話は夏休みを迎えた一家が別荘に出掛ける下りから始まっている。その別荘は古い、中世のお城を買い取ったもので、どうやら裕福な一家のバカンス物語らしい。

暫く読み進んだ祐子の目が点になった。一歳違いの姉と一緒にお城の探検をしていた主人公の少年が悪戯心から姉を脅かした。驚いて階段から足を踏み外した姉が頭を打って気を失ってしまった。主人公が近付いてみると、何と姉は下着を着けていなかった。主人公の少年が剥き出しになった姉の下半身を見てしまうと言う描写に出くわしたのである。文章は確かに歯切れが良く、描写も的確だった。それだけに初めて女の身体を目にした少年の驚きが手に取るように伝わって来る。

その晩、祐子は寝るのも忘れてその本を読み進んだ。妊娠中の使用人の妻を相手に初めての体験を済ませ、偶然下半身を見てしまった姉との行為も出て来る。それもどうやら生理中らしい。そんな二人の交わりを女中に見付かり、姉と共謀してその女中とも交わってしまう。次々と繰り広げられる赤裸々な情景に祐子が顔を赤らめた。

(これって、近親相姦よね)

中でも祐子は主人公が幼い頃に風呂場で叔母に可愛いものを口に含まれる描写が気になって仕方がなかった。祐子自身、昔、幼い弟のおちんちんに触った記憶がある。まだ小学生になったばかりの弟でも祐子が指

先で摘むと固くなってピンピン跳ねた。そんな思い出が蘇って来た。

ようやく半分ほど読み終えた祐子がソファアベッドに横になる。義兄の健介はこう言う小説が趣味なのだろうか。起き上がったもう一度本棚を眺めてみる。改めて眺めるとそこにはO嬢の物語やイマージュと言った古典的なエロチシズムの名著が並んでいた。エマニュエル夫人の原書もあった。

祐子はイマージュを手にとってパラパラとめくってみたが、これは祐子のフランス語力では到底歯が立ちそうにない。諦めて本棚に戻し、再びベッドに横になった。

祐子は何となく健介の顔を思い浮かべた。義兄の思いも寄らぬ一面に触れ、その義兄を男として見始めている自分に気付いた。その内、この本のことを聞いてみようかな、祐子はその時の健介の顔を想像しながら眠りに就いた。夢の中に糸纏わぬ健介が現れた。

翌朝、目が覚めると既にお昼近かった。受験が済んだのでゆっくり寝かせてくれたのだろう。パジャマ姿のまま洗面所に行き、歯を磨いていると健介がドアを開けた。

「あつ、ごめん」

慌ててドアを閉める義兄に祐子が思わず微笑む。いつの間にか祐子の中で健介がとても身近な存在になっていた。

顔を洗って食堂に行く姉は既に出掛けていた。テーブルには朝食の用意がしてあり、健介がキッチンカウンターの中でコーヒーを入れていく。

「お早う」

パジャマ姿のままの祐子をチラッと見た健介が入れ立てのコーヒープットをテーブルに置いた。

「お早う」

ございます、は付けなかった。そんな祐子の受け答えに健介が一瞬、おやつと言う顔付きになった。

「よく寝てたね。昨日の受験が上手く行ったのかな」

「うん、山がパツチり当たったの。多分、大丈夫」

「そりゃあ良かった。でも、まだ一つ残ってるんじゃないの」

「ああ、第二志望ね。そっちは絶対大丈夫よ」

「さあ、気を抜かない方がいいよ。あと三日頑張ればいいんだから」

「うん、気は抜かないわ。でも、何だかホツとした」

「今日一日ゆっくりすれば。そうだ、今晚は久美子がいないから、何か美味しいものでも食べに行くか」

「あら、姉さん留守なの」

「うん。会社の慰安旅行だって。今頃旅館に着いてる頃だろう」

祐子は急に胸が苦しくなった。今晚は義兄と二人きりになる。そう考えただけで動悸が高まって来る自分に内心苦笑した。

(何考えてるの、私ったら)

健介がそんな祐子の表情を見咎めて顔を覗き込んだ。

「え、ああ、何でもないの」

慌てて取り繕った祐子の顔が赤くなっていた。

祐子に書斎を明け渡した健介はリビングにノート型のパソコンを持ち込んで仕事をしていた。文献も置かず、何やら一心不乱に文字を打ち込んでいる。それとなく祐子が後に回ると健介がさり気なく画面を切り替えた。どうやら祐子には見せたくないものらしい。

遅めの朝食を食べ終えた祐子が食器を洗って棚にしまう。残ったコーヒーを自分と健介のカップに入れてリビングに運んで来た。

「ねえ、何書いてるの」

祐子が悪戯っぽい目で聞いた。

「あ、これ。駄文だよ。連載を頼まれてね、今日中に仕上げなければいけないんだ」

「それって、もしかして小説」

「まあね」

「どの雑誌に載ってるの」

「ちよつと言いくらいにくいような雑誌さ」

「ふうん、読んでみたいな」

「祐子さんが読むようなものじゃないよ」

「あら、勝手に決め付けないで。私だって色々読むのよ」

健介が諦めたようにパソコンのスイッチを切った。

「今晚、出来たら読ませてね」

なおも祐子が食い下がる。

「あ、ああ」

健介が曖昧に答えた。

祐子がリビングの飾り棚に目をやった。そこには数冊の雑誌が無造作に置かれている。一冊の表紙に『禁じられた関係』の文字を見付けた祐子がその雑誌を手を取った。

「ねえ、もしかしてこの雑誌」

「えっ、うん」

健介が困ったような顔をした。表紙に書かれたタイトルに兄嫁とか義母の文字が並んでいる。どうやら、その手の禁じられた関係特集のようだった。

「ねえ、義兄さんのペンネーム、何」

そう言いながら目次を見た祐子の目に「義妹と私、微妙な二人」と言うタイトルが入った。著者は高木健介となっている。健介の姓は榎本だが、祐子はこれに間違いないと確信した。

黙って読み始めた祐子の手元を健介が覗き込む。挿し絵を見て困ったような顔をした。それは姉夫婦の家に同居した義妹の話で、主人公の名前も祐子になっていた。

大学に受かった祐子だが、なかなかいいアパートが見付からずに姉夫婦の家に暫く居候すると言うストーリーである。お互いに意識しながらもなかなか踏み込めない義兄の気持ちをソフトなタッチで綴ったものだった。

「ふうん、男の人って、こんな感じ方するんだ」

「こくなって、どんな風に書いてあるんだい」

健介がとぼけた相槌を打つ。既にそれが健介自身の作品だと言うことは明らかなのだが、それを認めてしまうと二人の関係が微妙なものになってしまう。

「そうか、義理の妹って、言ってみれば奥さんの若い頃みたいなものだから、昔、恋人同士だった頃の雰囲気があるって訳ね。でも、姉さんと私、実際は随分違うと思うけどなあ」

「そうみたいだね。もっと祐子さんのこと知ってから書けば良かったかな」

健介がポロツと言ってしまい、慌てて横を向いた。自分が書いたものだと思ってしまうたのである。その回はふとした弾みで義兄が祐子の身体に触れてしまったところで終わっていた。

「ねえ、この後どうなるの。それが続き」

祐子が健介のパソコンを指差した。

「ま、そうだ」

「ふうん、今夜が楽しみだわ」

「読ませるなんて言っていないよ」

「でも、来月号買えば読めるんですよ。だったら同じよ」

健介が弱ったような顔で祐子を見たが何も言わなかった。

「出す前に私が添削して上げる、って言うのはどうかしら。義妹の立場からの感じ方も知っておいて損はないと思うけど」

「そう、だな」

健介が観念したように祐子の目を見た。

「じゃ、一人にして上げる。私が目の前にいたんじゃない書きにくいでしょ」
書齋に戻った祐子は思わぬ展開に胸の動悸が止まらなかった。健介の前では平気で振る舞っていたのだが、まだ男を知らない祐子には未知の世界の扉を開くようなもので、一つ一つの言葉、ちよつとした義兄の表情が胸の中で無限に広がって行く。

(今晚、どうなっちゃうのかしら)

それは真つ黒な不安と目映い光が交錯するような感覚だった。このまま何事もなく一晩が過ぎるとは到底思えない。何かが起こりそう。そんな予感が祐子をワクワクさせた。

「出掛けるのも億劫だから、寿司でも取ろうか」

夕方になって健介がそう言いに来た。祐子がアポリネールの小説を読んでいるのに気付いてギョツとした。

「祐子さん、フランス語読めるの」

「ええ、これでも仏文科受けたのよ」

「そう、で、理解出来た」

「うん。これなら何とかね。イマーージュの方はちよつと無理だったけど」

「そうか。フランス語読めたのか」

健介は明らかに狼狽していた。

「全部じゃないわ。後で分からないところ教えてくれる。所々、知らない単語が出て来るの。例えばキューって尻尾のことよね。他に意味があるの」

健介の顔が強張った。祐子にもそれが男のものだとは容易に想像出来たのだが、手持ちの簡単な辞書には載っていないかった。祐子の意地悪い質問に健介が考え考え答えた。

「後じゃなくて、前に付いてる尻尾だよ。悪魔の尻尾みたいな逆トゲの付いた。勿論、男にしかないけれど」

「ふうん、やっぱりそう言う意味なんだ。じゃあ、ヴェルジュ、鞭も同じ意味ね」

「うん」

「でもさ、フランス語って面白いのね。男のは全部女性名詞で、反対に女のは男性名詞」

「言われてみればそうだな。気が付かなかった」

「ねえ、朝、パンを食べたきりだからお腹空いちやった。お寿司じゃなくって、何か食べに行きたいな。今晚はイタ飯って気分なんだけど」

「そうか、そうするか」

「それとも、まだ書き終わってないの」

「うん、今回が最終回なんで、どう言う結末にするか、まだ決まらないんだ」

「じゃあさ、食べに行つて、帰つて来てから私も一緒に考えるつてのはどうかしら」

「いや、そうも行かないけれど。ま、いいか、食べに行こう」

健介は車を出して、少し離れたレストランに祐子を連れて行った。そこは住宅街の中の一軒で、表から見ただけでは普通の家にしか見えない。門の前に置かれたイーゼルにその日のメニューが貼られていなければ素通りしてしまいそうな所だった。

二人が注文したコースはメインディッシュが子羊のグリルで、前菜に出て来た手打ちのパスタが祐子を喜ばせた。最後のデザートはアイスク

ルームの上に洋梨を白ワインで煮たものを載せ、その上から苦みの強いチョコレートを掛けたものだった。

「美味しい。このチョコの苦みが何とも言えないわ」

「うん。洋梨もいい味してるね」

コーヒーも本格的なエスプレッソで、食事を堪能した祐子は帰りの車の中でもはしゃいだ。

「さ、結末を考えよう」

リビングに戻ると祐子が健介の前に陣取った。

「うーん、どうしようか」

困り顔の健介をよそに祐子が後に回ってパソコンの画面を覗き込む。

「ねえ、読ませて」

「うん」

仕方なく健介がパソコンの前を明け渡した。祐子がページを追いながら一通り目を通す。結末がついてないと言っていたが、話は一応完結していた。

「ふうん、何だか尻切れトンボね」

祐子が少しがっかりしたような口調で呟いた。

「何で」

「だって、ここまで来て踏み止まったらおかしいわ。私が祐子だったら絶対抱かれるな」

「そうかなあ」

「お義兄さん、もしかして私に気兼ねしたんじゃないの」

「まあ、そう言うことも無いとは言えないかな」

「駄目よ。ちゃんとお話はお話として考えなければ。話の流れでは、やっぱり二人は結ばれると思うわ。先月号読んだ人だって、絶対にそれを期待してる筈よ」

「うん、書き出しではその積もりだった」

「でしょう。途中で挫けちゃ駄目」

「そうは言うけど、実際にその場になると案外切欠って無いもんだよ。

例えば、俺が突然祐子さんに抱き付いたりしたら、もし仮に祐子さんにその気があっても興醒めだろう」

「うん。そうね。突然ギラギラした男なんか剥き出しにされたら、いっぺんに醒めちゃうわ」

「そうだよな。だから、いかにもって話は書きにくいんだ。よく頭わな胸元を見て欲情したとか、女の方も男の逞しく上を向いた姿を見て濡れたとか書く奴が多いんだけど、実際には何かの弾みって言うか、その気になる雰囲気ってのがあると思うんだ。女の裸見ただけで突っ走るのは中学生か、せいぜい高校生止まり。いい大人がそれじゃあ余りにも薄っぺらい」

「うん、言ってる。エッチな話って、意外とその辺が無神経なのよね。

そりゃあ胸の谷間とか、スカートの中なんか覗いたら男の人って感じるんだろうけどさ」

祐子が顔を上げて健介を見た。

「お義兄さん、どう言う状況だったら私に対してムラムラする」

「言いにくいけど、祐子さんが今朝から変なことばかり言うから、ちょっとは感じてるよ」

「あら、感じてくれてるんだ。私も少しは自信持ってるのかな」

「十分に魅力的だよ。女として」

「でもさあ、義兄さん、主人公の名前、何で私と同じにしたの。前からそんな気があったの」

「うん。ストーリーー思いついたとき、祐子さんのことが頭に浮かんだのは事実だな」

「ねえ、こう言うの書く時って、やっぱり色々想像するんでしょう」
「うん」

「私のおそこも、まるで見たように書くのね」
「違ってる」

「さあ、自分じゃしげしげと見たことなんか無いわ」
祐子が悪戯っぽい目で健介を見た。

「ねえ、女の人のおそこって、想像で書いてるの。それとも、今までの
経験を思い出して書くの」

「えっ、ああ。思い出して書くことが多いな」

「ってことは、結構沢山知ってるんだ」

「まあね。知らなきゃ書けない」

「私のは姉さんから想像したの」

「いや、別の女だ」

「ふうん、それにしちゃ毛の生え方なんかそっくりみたいけど」

「久美子のもっと毛深い」

言ってしまったって健介が照れ臭そうに頭を掻いた。

「ねえ、最後、書き直そうよ。ちゃんと結ばれなくちゃ駄目」

「でも、アイデアが浮かんで来ない」

「何なら私が実験台になって上げようか」

「えっ、祐子さんが」

健介がじっと祐子の目を覗き込んだ。慌てた祐子が目を逸らす。

「そんな目で見ないで」

「あっ、ごめん」

気まずい沈黙が流れた。話の筋立ては違うが、二人がギリギリの線まで来ながら、あと一つの切欠を掴めないと言う状況は小説そのものである。

祐子が横を向くと同時に健介も祐子の顔を見た。唇と唇がほんの数ミリまで接近する。その僅かな距離を超えたのは祐子の方だった。そっと触れた唇がやがて激しく求め合った。

「いいの」

健介が唇を離して祐子の耳元で囁いた。答える代わりに祐子が何度も頷いた。

祐子の身体を軽々と抱え上げた健介が書斎に入り、ソファ―ベッドの上に祐子を下ろした。祐子はそこが夫婦の寝室ではなかったことに安堵する。健介の手が素早く祐子のボタンを外し、あっと言う間に生まれたままの姿にされた。その手際の良さに祐子が舌を巻いた。

続いて健介も全てを脱ぎ捨て、祐子に被さって来た。再び唇が重なり、健介の手が祐子の肩から背中を優しく撫で回す。その動きは決して嫌らしいものではなく、むしろ祐子に安らぎを与えてくれた。

健介の手がそっと胸の上に置かれた。祐子にとっては初めての経験で、思わず身体が固くなる。そんな祐子の気持ちを探してか、健介はすぐには乳首に触れて来なかった。

少しずつ祐子の身体が潤んで来た。いつの間にかピンと突き出た乳首に祐子は痛みすら感じた。健介の唇がそっと乳首を含んだ。痛みを癒すような、優しい感触だった。

「あつ」

祐子の口から微かな声が漏れる。横目で見た健介の前が凄い角度で上を向いている。

（あんなのが入って来るんだ）

祐子の目には、それがとてつもない大きさに見えた。子供の頃は別として、大人の男の、それもこんなに大きくなった姿を目にしたことなど一度も無い。

「何言ってるの。あそこから赤ちゃんだって産まれて来るのよ」

祐子は姉の言葉を思い出して自分自身を奮い立たせた。何があるかと、今日こそ女になるんだ。祐子はもう一度自分にそう言い聞かせた。

健介は時間を掛けて両方の乳首を吸い続けた。それは不思議な効果を祐子にもたらしめている。吸われているのは乳首なのに、何故か体の芯が熱くなつて来る。そつと指先で確かめた祐子が驚きの表情を見せた。そこはシーツが濡れるほどに潤っていた。湧きだした滴が尻を伝っていた。

健介の手が祐子の内腿に置かれた。反射的に祐子が膝をきつく閉じ合わせる。そこが濡れてることを知られるのが無性に恥ずかしい。それでも健介の手がジリジリと上がって来た。

祐子の身体に電気が走った。健介の指先が敏感なところに触れたのである。祐子はピッタリと脚を閉じていても、その部分が正面から見えている。子供の頃は一本の筋が切れ込んでいるだけだった。今はそこからはみ出した唇のような襞がダイヤ形に開いた姿を見せている。

突然祐子が健介の手を上から押さえた。それに構わず健介の指がじわじわと襞を分け、中に入って来た。

「恥ずかしい」

祐子が消え入りそうな声で言った。

「大丈夫。力、抜いてごらん」

健介の声には有無を言わさぬ響きがあった。指先も優しい動きながら着実に奥を目指して進んで来る。後戻りは出来ないよ。そう言い聞かせるような義兄の態度に祐子が目を閉じた。僅かに弛んだ膝の間に健介の身体が押し入って来る。最早膝を閉じられなくなった祐子。すぐに健介の指先が入り口を探り当てた。

「ん」

健介が怪訝そうな目で祐子を見た。僅かに入り込んだ指先が強い抵抗

に出会ったのである。全く進めないと言うほどではないが、更に指先を送り込むと祐子の眉間にきつい皺が寄った。口元も歪んでいた。

健介が祐子の膝を抱え上げ、赤ん坊がおしめを取り替えるような姿勢にさせる。上に向かって口を開いた襞の中に先端を擦り付けた。ゆっくりとはまり込んだ健介が、入り口から僅かのところで頑強な抵抗に出会った。

「もしかして、初めてじゃないの」

健介は戸惑いを隠し切れなかった。

「やめないで」

祐子の両手が健介の腕に食い込んだ。

「お願い、やめないで。最後まで行って」

意を決した健介が再び腰に力を込める。祐子の顔が苦痛に歪み、思い切り唇を噛み締めた。先端に感じる異常なきつさに健介は祐子がバーজনだと確信した。行くべきか、やめるべきか、迷いが健介の頭の中を行き来した。

「お願い」

次の瞬間、祐子が自分から健介の腰に手を回し、健介の身体を思い切り自分の方に引き寄せた。

「キヤーツ」

鋭い悲鳴が健介の耳元で炸裂した。一瞬のうちに抵抗が消えた。半ば飲み込まれた健介が祐子の凄惨な締め付けに遭い、行くも退くも出来ぬ状態に追い込まれた。

「初めてだったんだ」

健介が感慨深げにそう囁いた。必死にしがみつくと祐子の髪を健介がそつと撫でた。

「無理しなくていいよ」

これ以上祐子に体重が掛からないよう、健介がそつと腰を浮かせた。
「嫌。ちゃんと最後まで来て」

祐子がもう一度回した腕に力を込めた。それに応えて健介が再び注意深く進み始める。狭い通路を押し広げ、徐々に奥へと進んで行く。やがて先端に何かが触れた。

「あつ」

祐子が小さな呻き声を上げた。

「入ったよ」

健介が腰を回してその感触を確かめた。

「あ」

再び祐子が声を上げた。

「驚いたなあ、初めてだったなんて」

「ごめんなさい」

「いや、謝るのは俺の方さ。気が付かなくてごめん」

「ううん、嬉しい」

健介が祐子をきつく抱きしめ、そのまま動かなくなった。時間だけがどンドン流れて行った。

「分かるわ。お義兄さんが私の中に入ってる」

「うん、しっかり入ってるよ」

「ねえ、このままじゃ駄目なんでしょう」

「気にしなくていい。今日はもう無理だよ。このまま暫く抱いてて上げる」

「ありがとう。でも、後でどうすればいいか教えてね」

「教えてって、何を」

「男の人って、出さないと終われないんでしょう」

「ああ、そのこと。心配しなくていいよ」

「嫌、そんな、子供みたいに扱わないで。ちゃんとさせて」

「分かった。でも、もう少しこうして欲しい」

「私も」

健介は祐子のきつさを味わいながら小説の結末を考えていた。結ばれた義妹が実は処女だった。これは話の筋立てから考えると悪くない。ただ、結ばれました、目出度し、目出度しでは話にならない。その辺を考えていると健介の身体から勢いが無くなって来た。

「ねえ、今、小説のこと考えてたの」

祐子が敏感にそれを察知した。

「うん。結末がなかなか難しい」

「私のこと、そのまま書くの」

「うん。でも、それだけじゃたわいもない話しになってしまう」

「何か変な気分」

「何が」

「だって、私のあそことか、こうして入れた感じとか、そのまま書くんでしよう。何だか自分の恥ずかしいところを人目にさらすような、そんな感じだわ」

「ああ、そう言う意味ね。うん、その辺はしっかり書こうと思ってる」

「わあ、恥ずかしい」

萎え始めた健介を祐子の強い締め付けが徐々に押し出そうとしていた。最後に先端がツルツと勢い良く弾き出された。その瞬間、祐子が痛そうに顔をしかめた。

「ごめんね、血が出てる」

そのままの姿勢で放心したように横になっている祐子の脚の間に健介の顔が被さって来た。

「あ、嫌」

祐子が慌てて膝を閉じようとしたが、健介の頭が邪魔をした。

「駄目え、汚い」

それには耳を貸さず、健介が優しく襷の内側を舌の先で拭い始めた。甘酸っぱい匂いに混じって微かに血の味がした。

ようやく健介が顔を離れた。祐子は脚を広げたまま激しく息を弾ませている。出血は既に治まったようだった。今までは見られなかったクレ―ターが濡れた襷の間にポツカリと口を開けていた。

「私、女になったのね」

祐子が荒い息の合間に呟いた。

「うん。俺でよかったのかな」

「嬉しい」

「今日はゆっくり寝なさい」

健介が毛布を掛けようとする、弾かれたように祐子が飛び起きた。

「駄目。最後まででって言ったでしょう」

祐子が健介の足元にしゃがみ込んだ。

「ねえ、どうすればいいか教えて」

「あ、ああ。じゃあ、握ってくれる」

「こう」

祐子の手が恐る恐る健介の根元を握りしめた。

「いや、もう少し上の方」

「この辺」

祐子の顔が徐々に近付いて来た。さっき、健介が口で愛撫したので自分も同じようにと思ったらしい。健介はそれを黙って受け入れた。ぎこちない口がゆっくりと健介を包み込む。このまま口の中で果てていいものか、健介はまだ迷っていた。祐子の頭が激しく上下し始めるとそんな余裕は無くなって来た。

「だっ、駄目だ」

健介が慌てて祐子の顔を引き離そうとしたが、反対に強い力で吸い込まれ、その瞬間に全てが炸裂した。それでも祐子は口を離そうとはしなかった。

翌朝、健介は息苦しさの中で目を覚ました。気が付くと健介の上に祐子の身体が乗っていた。

「お早う」

祐子がそう言って健介に唇を重ねた。

「あっ、お早う」

「ねえ、元気になってる」

祐子は健介の朝の状態を感じたらしい。潜り込んで来た手がそっと握りしめた。

「えっ、これは生理現象だよ」

「そうなの。でも、もう一度抱いて」

「まだ痛むんじゃない」

「大丈夫。それに、この痛みって一生に一度でしょう。心に刻んでおきたいの」

「そうか。女は男とは違うからな」

「ところで、小説は書き上げたの」

「うん。あれから書き上げた」

「じゃあ、もうお仕事無いんでしょう。抱いて」

健介は確かめる積もりで祐子の膝を開き、頭わになったところに唇を這わせた。祐子がすなりとそれを受け入れたので健介が驚く。一度女になるところも変わってしまったものか。バージンの経験は初めてだった健介には新鮮な驚きだった。

昨日の晩よりも少し強めに唇を動かしたが痛がる様子はない。健介は

舌の先でペールをめぐり、小さな塊を探り当てた。祐子の腰がベッドから浮き上がった。

「お、お義兄さん」

祐子が切なそうな声で呼んだ。

「何」

「それ、気持ちいい」

「これ」

「うん。もつとして」

頷いた健介が今度は唇に挟んで強めに吸い込む。祐子の身体が大きく反り返った。

健介が祐子の尻の下に枕を入れた。こうすれば自然な形で無理なく結合出来る。ゆっくりと沈めて行くと祐子の口からため息が漏れた。健介がそつと祐子の表情を窺ったが、そこに苦痛の色は見えなかった。

「痛くない」

それでも念のために健介が聞く。

「大丈夫。昨日は凄かったけど、今日はちよつと引きつった感じがするだけ」

健介が指先で確かめる。出血は無いようだった。

「どんな感じ」

「口では上手く言えないわ。ううん、嫌な感じじゃないの。昨日だった痛かったけど、入ってくる感じは悪くなかった。あれで痛みが無かったら、きつと気持ち良くなるんだらうなって思った」

「今は」

「まだ分からない」

「口とこれ、どっちがいい」

「そりゃあ、口の方がずっと気持ちいいわ。またしてくれる」

「うん」

「あ、奥に届いた」

「分かる」

「うん、分かる」

今度は健介がゆっくりと退き始めた。

「あ、あ……」

祐子が健介にしがみついた。

「ごめん、痛かった」

慌てて健介が動きを止める。

「ううん、やめないで。今の、凄くいい」

「こう」

健介が少しだけ身体を退いた。

「そ、そう。その感じ。入ってくるときよりずっと気持ちいい」

十八歳の祐子の身体は健介が動く度に新たな感覚に目覚めるらしい。

健介がゆっくりとした抜き差しに腰の回転を加え始めると祐子の身体が小刻みに震え始めた。同時に、それまで締め付ける一方だった内部に微妙なうねりが生じ、少しずつ健介に動くゆとりを与え始めている。

健介が思いきり突き込んだまま腰を回すと祐子が悲鳴を上げた。

「だっ、駄目。変に、変になる……」

健介は祐子の声には耳を貸さず、一気に責め立てた。まだ入り口の傷は癒えていないので抜き差しはせず、回転だけを強めた。

「うーっ」

祐子の身体が一瞬硬直し、次の瞬間ガクツと力が抜けた。一気にぬめりが増したように思えた。

ようやく祐子が目を開けた。

「わ、私、どうなったの」

「イッたんだよ」

「分からない。急にフワーツとなつて、何にも分からなくなつちやつた」

「そう言うのを、イクつて言うのさ」

祐子が大きいため息をついた。

「何だか、とつても幸せな気分。お義兄さんが入つてる。この感じ、好きになつちやつた」

健介が首を回して時計を見た。いつの間にか十二時を過ぎている。健介は久美子がお昼過ぎには戻ると言っていたことを思い出した。朝食を済ませたらすぐに宿を出ると言っていたのである。

「そろそろ起きよう」

腰を浮かそうとする健介を祐子が引き戻した。

「駄目。もうちょっとこうしていたい」

「うん、分かるけど、もうすぐ久美子が戻ってくるかも知れない。昼過ぎには戻ると言つてたんだ」

「それでも駄目。あと三十分」

健介が怪訝そうな顔付きになった。久美子が戻つて来ると言つても祐子には全然切迫した様子が見られない。仕方なく健介がもう一度腰を回し始めた。すぐに祐子が悶え始めた。

グツタリと横になつている祐子から健介が解放されたのはそれから四十分程してからだった。慌てて脱衣所に入り新しい下着を履く。いつもの部屋着を身に着け終えたところで玄関の方から久美子の声が聞こえた。

「ただいま。今帰ったわ」

「おう、早かつたな」

照れ臭そうな顔で健介が迎えに出る。

「お昼、食べた」

「いや、まだだ」

「祐子は」

「受験が終わって気が抜けたんだろう。まだ寝てるよ」

「ふうん、あの子が昼過ぎまで寝てるなんて珍しいわね」

次の瞬間、久美子が僅かに鼻を動かした。健介の顔がにわかには強張った。ついさっきまで祐子の中に入っていたのである。下着は替えても健介の身体からは祐子の甘酸っぱい匂いが漂っている。当の健介にも分かるほどだから、普段から匂いに敏感な久美子が気付かぬ筈が無い。

「そう、お昼まだなの。ちょうどいいわ。小田原の鯛飯買って来たから、一緒に食べよう」

寝室に荷物を置いて着替えて来た久美子が祐子のいる書斎のドアをノックした。

「祐子、お昼よ。鯛飯買って来たから、一緒に食べよう」

「はあい、今行く」

中から祐子の明るい返事が返って来た。健介がホッとしたのも束の間、久美子がドアを開けて書斎に入って行った。

服は着てるだろうか。濡れたシーツは隠してくれたか。さっきのままだとそれこそ万事窮すである。

久美子は暫く出て来なかった。聞き耳を立てる健介だが、心配したような罵声は聞こえて来ない。それどころか、時々久美子の笑い声さえ聞こえて来た。

ようやく久美子が書斎から出て来た。暫くして祐子も顔を出す。健介はいつになく祐子の顔が輝いているように思えた。

「さ、お腹空いたでしょう、二人とも」

久美子の言葉に健介が思わず祐子の顔を見た。それが何を意味するか、健介の背筋に冷や汗が流れた。

「小田原の鯛飯って美味しいのよ。ちょっと量が少ないけど、我慢してね」

久美子が弁当の包みを開けながらニヤニヤ二人を見比べた。

「祐子、上手く行ったみたいね」

久美子が祐子にウィンクした。

「うん、バッチグーよ」

「まだ一日残ってるぞ」

健介が口を挟んだ。

「えっ、祐子はまだあと一週間はうちにいるのよ」

久美子の口から予期せぬ答が返って来た。

「はあ」

健介が思わず二人の顔を交互に見比べた。まだあと一日受験が残っていると言った積もりなのだが、久美子と祐子は違うことを考えていたらしい。

「何の話だ」

今度は久美子と祐子が顔を見合わせた。健介はその瞬間、全てを悟った。

「ところで、お話の結末はどうなったの」

祐子が悪戯っぽく聞いた。

「今の結末をそのまま頂くよ」

健介がぶっきらぼうに答えて鯛飯を頬張った。